

# 兵主神社の「株」を繞る紛争の一例

祝 宮 靜

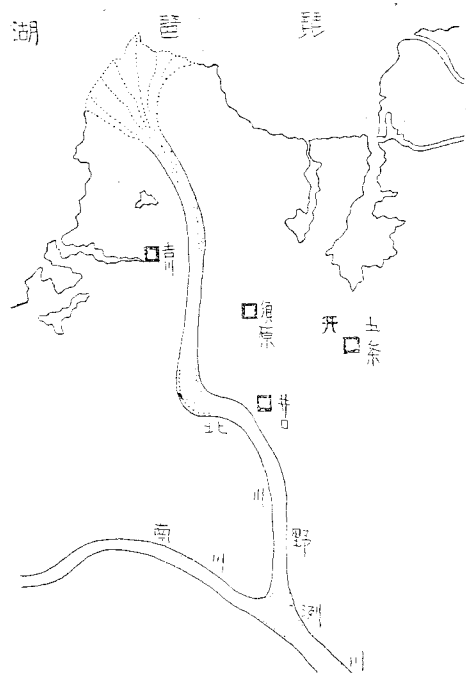
一

拙稿「江州兵主神社の築漁文書に就きて」(神社協會雜誌・昭和十一年四月號)の中で「一つ一つの事件を夫々系統的に叙述し得るだけの材料を提供する可能性があると思はれるもの」として紹介した例が三件あつた。本稿に於ては、

寶曆九年三月より同十三年五月頃に及ぶ一件を詳細に考證し、兵主神社神供漁場の「株」に關する研究の一部たらしめたいと思ふ。

二

兵主神社は、琵琶湖に向つて北流する野洲川の下流域、近江國野洲郡五條村に鎮座し野洲川を「兵主太神宮之御手洗シ川」と稱してゐた。この野洲川の川尻、吉川村の地先に築漁場があつて、これを「神獵之築」とか「供御調進之築」と稱したのである。



兵主神社神供漁場の「株」を繞る紛争の一例(祝宮靜)

野洲川に於けるヤナ漁は古くより行はれてゐたもので、上流域に鎮座する三上(現今の御上)神社でもヤナ漁場を社領としてゐた時代があつたのである。ヤナ漁法に就ては拙稿「三上神社の供祭築」(國學院雜誌・昭和十年八月號)で稍々詳しく説いたから茲では重ねて觸れないことにするが、一種の定置漁業であるといふことを一言して置く。

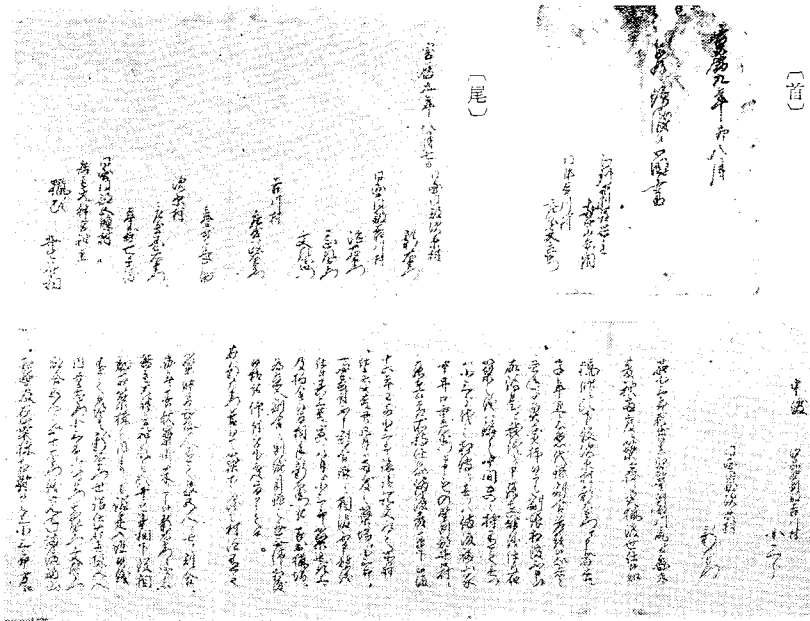
三上神社のヤナに於ては「衆」の觀念は、勿論、現はれてゐたけれど「株」の觀念は未だ現はれてゐなかつたやうに考へられるのである。しかるに兵主神社のヤナに於ては「株」の觀念も明瞭に現はれてゐるのであつて、この點は特に研究の價值があると思ふのである。

三

こゝに取扱はんとする事件に關しては寶曆九年八月日附の「被<sub>レ</sub>爲<sub>二</sub>仰渡<sub>一</sub>い留書」が概要を傳へてゐるから、先づ之を紹介しなければならないが、一應、事件の關係人物に就いて説明する必要があるであらう。

主なる關係人物は吉川村の小三郎(川端氏)・須原村の新右衛門(東氏)・井口村の重右衛門と悻源次(井口氏)などである。このうち井口重右衛門は他國に仕官し所持せるヤナ株を小三郎に譲つたので小三郎は一人で二株を所持することになつたが、「築頭下役」とか「兵主代官」とか「獵師頭下役」とか稱してゐた新右衛門は仲間を代表して小三郎の既得權を無視せんとしたのである。そこで小三郎は京都町奉行所に訴へ出たものゝ如くであるが、その訴訟狀は見當らないし、また訴訟の月日も明白でないけれど、恐らく寶曆九年の二月頃ではないかと思はれる。これに對して同年三月二日附の「乍恐返答書」なるものが新右衛門より奉行所に宛て、差出されたのである。それに次ぐ史料が前述の同年八月日附「留書」である。

この「留書」の内容は三部分より成るものであつて、第一部は小三郎の主張・第二部は新右衛門の釋明・第三部



〔部 一 内〕

は奉行所の判定である。因に第二部は新右衛門の「乍恐返答書」を要約したものである。

さて第一部に於ける小三郎の主張によると、野洲川尻で毎年夏秋兩度にヤナを掛けて魚を捕へ之によつて渡世してゐたが、獵師頭下役の新右衛門は寶曆六年まで賣上高の配當を寄越してゐたにも拘らず翌七年よりは全く配當を寄越さなくなつてしまつた。尤も小三郎は一人で二株を所持してゐたのであつて、一株は「代々相傳り」他の一株は井口村の重右衛門から譲り受けたのであつた。重右衛門は備後國福山の阿部伊豫守に奉公して郷里を離れなければならなかつたから、所持のヤナ株を小三郎に譲渡したのであるが、それは寛保三年頃のことらしい。とにかく小三郎は二株所持してゐたが、寶曆七年の五月頃から夏秋兩度のヤナ場へ寄せ付けず收益も配當しなくなり、翌八年八月からは「小三郎築取上ヶ及湯命い間」新右衛

門を吟味してほしい——と云ふのであつた。

第二部は新右衛門の釋明乃至反駁であるが、その内容は非常に好き参考資料となるから、寶曆九年三月二日附の「返答書」によつて考證の材料を得たいと思ふ。新右衛門の説明するところによると「右築之儀者村方有<sup>(註)</sup>之、築仲ヶ間當時貳拾人有<sup>(註)</sup>之、五人宛四口ニ割合仕、毎年春秋築懸ヶ來申<sup>(註)</sup>」次第であつたが「右壹株五人之内、重右衛門・小三郎・治右衛門・甚左衛門・文左衛門都合五人之處、重右衛門儀、先年備後福山安部伊豫守様ニ御奉公仕罷有<sup>(註)</sup>ニ付右築株之儀、相對之上、小三郎方江讓請<sup>(註)</sup>い由」であつた。しかし重右衛門より小三郎へヤナ株を讓つたといふことは仲間一統の確認するところではなく、當の重右衛門も既に死去して實情が不明であつたのである。しかも小三郎が「仲間江無<sup>(註)</sup>相談」ヤナ株を讓受けたといふことは「築仲ヶ間仕法ニ茂相背<sup>(註)</sup>ニ付」寶曆七年秋より翌八年春まで重右衛門株は新右衛門が保管することにしたのである。新右衛門が保管の任に當つたのは、彼自身が説明する如く「私儀ハ兵主太神宮神領之築頭井口<sup>(註)</sup>宰相下役相勤申<sup>(註)</sup>ニ付右築株之内、茂彼是入組<sup>(註)</sup>儀有<sup>(註)</sup>之の得者私世話仕<sup>(註)</sup>い」と謂はゞ支配人の地位に在つたからであらう。とにかく以上の説明で判るのは、兵主神社のヤナ仲間が二十人より成り五人づゝ一組を作つてヤナ漁を營んでゐたこと・重右衛門と小三郎とは元來一組であつて重右衛門が他國に仕官したため株を小三郎へ讓つたこと・ヤナ株はヤナ仲間に無斷で讓渡してはならないこと・係争中の株は支配人方で保管すること・などの事實である。

さて更に新右衛門の説明を聴くと、寶曆七年の秋より翌八年の春まで(つまり二漁期である)重右衛門株を保管してゐたところ、小三郎が彼はいふので寶曆八年八月には一應清算して「壹人分鳥目貳貫文」の割で小三郎の組(五人分)へ提供したのである。丁度その頃、故重右衛門の悻源次が福山より歸省し、新右衛門にヤナ株のことを問ひ質

( 38 )

( 39 )

したので事情を説明すると「仲間間式法不相立<sup>(註)</sup>儀者難<sup>(註)</sup>致」と云つて、小三郎方より亡父の讓り狀を取り戻した。「重右衛門築相續仕<sup>(註)</sup>い段、仲間<sup>(註)</sup>酒肴等差出シ」正式に披露したのである。源次の意志は後でも明瞭になるが、萬事の處理を新右衛門に委任したから新右衛門は仲間を召集して相談の上、源次への配當を清算して之を與へたのである。かくして源次は再び福山へ赴き紛争の中心から離れてしまつたわけである。そこで事態は如何に落着いたかと云ふに、まづ「小三郎讓請之譯ハ消申<sup>(註)</sup>い」即ち重右衛門株に對する小三郎の支配權は無効となり、次に正式の披露があつたから重右衛門株は源次株として存續することとなつたのである。以上の説明で判るのは、ヤナ株は父子の相續關係でも仲間一統に披露して確認を受けなければならないこと・配當の清算などは仲間合議の上で決定せられたこと・現地不在の株主があつたこと・などの事實である。

かくして新右衛門の説明によれば、萬事落着いた筈であつたが、小三郎は重右衛門の讓り證文を所持せるが如く申立て、その上、新右衛門に對して清算請求書を差出したりした。この請求書を見ると二十四年前にも遡つて利足を計算したり「小三郎勘定之仕方ハ私合點不<sup>(註)</sup>參申<sup>(註)</sup>い」といふ次第であつた。また其外、収益の分配に就ても不審の點があつたのである。とにかく重右衛門築を新右衛門が沒收したやうに云ふのは事實でない——と新右衛門は釋明したのである。

第三部は奉行所の判定であつて「右出入逐<sup>(註)</sup>吟味<sup>(註)</sup>い處」ヤナ株に就ては小三郎が重右衛門より讓受けたといふけれど重右衛門の悻源次の申立によれば父も死去してしまつたことだし讓り證文には加判人(證人)も無いことだし「明白成證書」とは云ひ難い。また収益の分配に就て調査すると互に清算授受すべきものもあるやうであるが、もともと「獵仲間之内、前々々申合せを以、致來<sup>(註)</sup>い取引之儀」であるから「御役所<sup>(註)</sup>之沙汰ニ者不<sup>(註)</sup>及」と云ふわけ

井口「宰相差圖を以、小三郎・新右衛門・其外獵師共納得致しい様可<sub>レ</sub>取斗<sub>レ</sub>」き旨を命じたのであつて、要するに問題のヤナ株は小三郎に屬せずとなし収益の分配清算は井口宰相をして公平に行はしめるといふことに定めたわけである。この判定に於て注意すべきは、重右衛門より小三郎へのヤナ株譲渡を認めない理由が本人重右衛門の死亡と證人なきことに在るといふ點である。即ち譲り證文だけでは「明白成證書」と認められなかつたわけであつて、新右衛門の主張せる「仲間仕法ニも相背い」といふ點には觸れてゐないところ、味ふべき判定と思はれる。それからまた數字的紛争の解決を井口宰相に委任したことも注意を要するところであつて、明に「獵師司とりい井口宰相」とあるは、宰相のヤナ仲間全體に對する權威を暗黙裡に認めてゐたわけであらう。つまり私的な慣習法を表面きに認めるやうなことはせずして、しかもヤナ仲間一統の納得する解決法を示したものと考へられるのである。なほ小三郎個人に對して「手錠申付い條、急度相愼可<sub>レ</sub>罷在<sub>レ</sub>い事」を命じたが、これは小三郎が新右衛門を訴へるに當つて、自己に有利なる「消證文を以申立」たからであつた。この點に就ては年月日不明の一史料が事情を傳へてゐるから参考のため引用して置く。即ち小三郎より證據として差出した譲り狀に就て源次の考へるところでは加判人も無<sub>レ</sub>御座、父重右衛門印形手跡等茂<sub>〔附カ〕</sub>定<sub>〔附カ〕</sub>たしかに亡父の渡し置いた證文と斷言することを躊躇しなければならぬといふやうな有様であるし、その上、貳通あつた證文のうち「壹通ハ勝手ニ文言ヲ消シ奉<sub>レ</sub>差上<sub>レ</sub>い」といふやうな事情であつたことである。かくして察するに、小三郎が重右衛門よりヤナ株を譲り受けたのは事實とするも、それが仲間慣習法に背くものであつたため小三郎は文書偽造を企て譲渡關係を合法化せんと謀つたから、奉行所の心證を害するといふ結果になつたのであらう。

( 40 )

とにかく奉行所の判定に對して、小三郎と新右衛門は勿論、小三郎と同じ組の治右衛門や甚左衛門や文左衛門も、

( 41 )

また吉川村と須原村の村役人も、兵主神社の神主井口宰相も「右被<sub>レ</sub>仰渡<sub>レ</sub>い趣、奉<sub>レ</sub>承知<sub>レ</sub>い」と應じ、一先づ事件の落着いたのが寶曆九年八月七日のことであつた。しかし更に井口宰相を中心として重右衛門株を繞る収益清算の問題が残つて居り、これが圓滿に解決しなければ眞の落着きとは稱することが出来ないわけであつた。

## 四

しかるに寶曆十三年四月二十五日附の「濟狀之趣ヲ以、爲<sub>レ</sub>取替<sub>レ</sub>證文」なる史料を檢すると、却つて再び紛争の繼續を裏書きするものを見出すのである。なほ年月日なしで返答書の案文と思はれる史料が二通ある。これも同じく寶曆十三年のものであらうけれど四月二十五日以前のもものと解せられる故、先づ之から考證の材料を拾つて見たいと思ふ。

その一通は「獵師頭井口宰相・築仲ケ間新右衛門・次右衛門・文左衛門・甚左衛門・此外拾人」と前書せるもので、最後は「此儀」と記したまゝであるところ、他の一通と同様である。これによると、小三郎が定七なる者を代人として、第一次紛争の後始末は井口宰相が善處するやうに命ぜられたにも拘らず「宰相儀、築仲ケ間馴合、築株押置、馴合銀徳用不<sub>レ</sub>相渡<sub>レ</sub>い」と訴へた。そこで一同より「右築株之儀ハ井口重右衛門株ニ而今ニ重右衛門悖源次所持仕居い」と釋明したところ、源次の所持するヤナ株ならば収益配當は源次へ渡すべきものであるが、その請取書はあるか・配當の明細書はあるか・有れば差出すやうにとのことであつたといふのである。かくして第一次紛争に對する判定が下されてより足掛け五年目に又もや小三郎が井口宰相以下を訴へた理由は、かの判定に對して井口宰相以下が忠實でなかつたといふに在つたのである。

他の一通は前関文書で「申上い者」といふ文言より始まつてゐるが、これは恐らく「源次申上い者」であらうと

源次郎は父の遺言に依りて、毎年下作通  
 之徳用ハ小三郎江相渡シ、その他は新右衛門と井口村の忠左衛門(源次  
 の伯父)が保管して源次へ送るといふことにしたが、源次は強て請取らう  
 といふ考へは無いけれど「社法に應じ可申問」よき様に取計つて貰ひた  
 いと申出でた。しかし之は「築作法可相立ため」ばかりに小三郎を下作  
 として實際は亡父の譲り狀通り小三郎へ權利を譲らうといふ意味ではな  
 く、源次の考へでは今まで小三郎が支配し來つたのに自分へも收益を配當  
 せられるやうになつては小三郎が困るだらうと云ふのであつた(これは源次  
 の意志を新右衛門などが曲解してゐるのである)。もともと源次は父がヤナ株を  
 所持してゐたといふことさへ知らなかつた位であるから別に配當を受ける  
 にも及ばないのであつて「小三郎持株同様ニ支配仕仕様」に希望したので  
 ある。かく考へると寶曆九年三月二日附の新右衛門「返答書」にヤナ株の  
 配當を「源次江私相渡、請取書取置申、然者源次大慶仕、國元江罷歸  
 り申」とあるは、配當を得て悦んだのではなく名分の明になつたことを  
 源次は悦んだのであらう。こゝに源次と新右衛門などとの間に見解の相違  
 があつたものと考へられるが、新右衛門なども後では源次の意見に牽制せ

新右衛門

(42)

(43)

られたことは事實である。勿論、源次も關係人物の一人ではあるが、實際には紛争の中心より離れた存在であつた  
 故か、可なり嚴正な態度を持したものの如く一方ではヤナ仲間慣習法を重んじつゝ他方では小三郎をも困らせない  
 やうに努めたのであつて、寶曆十三年五月日附の井口宰相あて書狀なども、この際ついでに引用して置く必要がある  
 であらう。尤も此書狀の差出人は「井口源兵衛」となつてゐるが、内容よりして源兵衛は源次の改名したものと考  
 へられる。即ち「又もや紛争を生じて自分にも相談せられたが、先年も言明した通り、自分は收益の分配に預らう  
 とは考へてもゐないし遠國に仕官してゐる身なれば詳しい事情を知らない故、井口宰相の取計ひで慣習法に従ひ、  
 小三郎も立行き仲間一統も融和するやうに善處して貰ひたい。將來また紛争を生じても自分に相談せられる必要は  
 ない」といふのであつた。かくの如き彼の態度が紛争全體に明朗な影響を與へたことは確に見逃せないところであ  
 ると思ふ。とにかく彼の意志は新右衛門なども之を尊重せざるを得なかつたばかりでなく「小三郎譲り請ひ與申儀  
 者心得違ニ而下作相勤右築支配仕仕へ者申分無之」と同意を表し態度を明にしたのであつて、問題のヤナ株を所持  
 するものは飽くまでも源次であり、小三郎は飽くまでも下作であるといふ原則論に満足せざるを得なくなつたので  
 ある。この文書も是以上のことを考證する材料にはならないが、第二次紛争に當つて源次の證言が徹せられたこと。  
 それが公平なる解決への方角を指示したこと・などの事實を知らしむるのである。

右に引用した二史料は共に年月日も不明であり、その他の點でも不完全なものであるが、第二次紛争の経過の一  
 部を傳へるものといふことが出來よう。而して其結果に就ては前にも一言した寶曆十三年四月二十五日附の「濟狀  
 之趣ヲ以、取替爲證文」が之を略述する。即ち寶曆九年八月七日の判定によつて收益配當の清算授受は井口宰相が  
 取計ふべきものであつたにも拘らず宰相は、一向、その善後處置を講じようとせず、小三郎は其後も收益の分配

に預らなかつたので遂に宰相を初め新右衛門その他十五人を訴へたが、須原村・吉川村の村役人などが間に立つて和談を成立せしめたのである。先づ例のヤナ株は源次の所持するところ。小三郎は其下作。といふことは矢張り不動の原則であつたが、収益の分配法に就ては左の如く決定した。即ち

(イ) 全収益(壹株分)の二分ノ一は小三郎の所得とす

(ロ) 他の二分ノ一は更に折半し四分ノ一は井口宰相の保管するところ・残り四分ノ一は小三郎の所得とす

といふわけで、全體から見ると収益の四分ノ三が小三郎の手に入るのであつた。なほ斯の如き分配法に就ては説明が附せられてゐるから之を参照すると、全収益の二分ノ一を小三郎の所得としたのは「惣而下作之徳用如し此ニ付」で一般の原則に基いたものである。それから宰相が四分ノ一を保管した理由は「株主故、源次へ宰相可相渡」きものであつた。本來ならば株主の配當は二分ノ一であつたが、源次は既に説明した通り「徳用ニ可致存寄無之」きものであつたから、全く分配しないでもよかつたのである。しかし井口宰相や新右衛門などとしては源次が株主であるといふ原則論の象徴を確立したかつたから、収益の四分ノ一を源次へ渡すといふ名目で宰相が之を保管することにしたのであらう。また最後に注意すべきは更に残り四分ノ一も小三郎へ配當せられるといふことで、その理由は「前方譲受いと申事も有之儀ニ付」と説明せられてゐる。ヤナ株譲渡は慣習法に反するばかりでなく、小三郎の場合は證據書類さへ充分でなかつたのであるが、一時的とはいへ重右衛門株を譲受け支配した事實があるから、その権利を認めたのであらう。その上、ヤナ株譲渡に關しては小三郎ばかりでなく故重右衛門にも慣習法を犯した責任はあるのであるから、小三郎にのみ制裁を加へるといふことは不公平であるとも考へられたのであらう。いづれにせよ、結局、小三郎は収益の四分ノ三を得ることになつたのであるから、和談の結果は必ずしも小三郎にとつ

( 44 )

て甚だしく不利とは云へなかつたのではないかと思はれる。

次に四ヶ年半の間(第一次紛争から第二次紛争まで)の収益清算に關しては左の如く決定した。即ち「株主へ可相渡」分之貳分半」を向ふ四ヶ年半は小三郎の所得となし、四ヶ年半すぎたならば矢張り原則通り株主源次の所得とするが「宰相可相渡」を條件とするのであつた。そこで實數上のことは別として、小三郎の要求した第一次紛争前の収益清算は黙殺せられた形と云ふべく、後四ヶ年半だけの損害を辨償せられるといふわけであつた。

以上で第二次紛争の経緯も、大略、明かになつたが、このまゝ解決したか否かは判らない。和談は成立しても眞の解決は實行に在るからである。實行されたか否かは之を徵する史料がない故、事件そのものに關する考證は以上で止めなければならないわけである。たゞ第二次紛争に關聯して、斷簡ではあるが、數字的史料の殘されたのを見出すから附記して置く。それは収益清算授受に就て双方の主張を申告したものらしく、例を挙げると、寶曆七年の春ヤナの収益割合として銀六十四匁を受取らねばならぬと小三郎が云へば、新右衛門その他は、一人前の割合は銀二十二匁であつたが源次へ渡すべきものがあつたので、之を流用したから「銘々受取銀者無御座」次第であつたと反駁し、たゞ此事を小三郎に相談しなかつたのは「私共不至之儀ニ御座」間、割合貳拾貳匁へ相渡し可申」と譲歩してゐる。また寶曆七年の秋ヤナと八年の春ヤナに小三郎の承服しがい費用が課せられ之を差引いて収益の分配に當てたから「私不得心入用之分」銀三十一匁四分一厘を受取らねばならぬと小三郎が云へば、新右衛門その他は、ヤナ場の費用は仲間一統の負擔であるから「小三郎へ懸ル間敷道理者無御座」間「彼も分擔するのが當然であると反駁してゐる。なほ又、小三郎の下作たる三左衛門・兵助の兩人にヤナ仲間より銀十六匁八分を貸付けてあるが之を取立てる責任は小三郎にあるといふやうなことを互に協定したりしてゐる。この史料は前にも一言し

た如く斷聞であるが、その形式内容よりて第二次紛争に當りし奉行所へ提出せんとした書類なることは明白であるから、和談成立以前のもものと認められ、また從來双方の數字的な主張が如何様であつたかといふ事の一端を傳へるものとも考へられるであらう。

## 五

殘された史料によつて出来るだけ忠實に事件の經過を考證しようとしたが、實は第一次紛争とか第二次紛争とか稱すべきほどの大事件ではなかつたものゝヤナ株を繞る紛争の一例としては可なり注意すべきものであつたことが判明したのである。即ち此紛争の重點は株主不在の場合に置かれてゐたのであるから極めて特殊な例であつたが、一方では一般的な原則より全く離れることの出来るものでもなかつたから、自然、ヤナ株仲間の慣習や組織などにも觸れなければならなかつたため、次の如き事項が明白にせられたのである。

イ ヤナ株の賣買譲渡は原則として行はれなかつたこと

ロ 已むを得ざる事情によつて賣買譲渡の必要があつても仲間一統の承認を得なければ無効であつたこと

ハ 父子相續の場合でも仲間一統の承認を必要としたこと(酒肴を出して披露する)

ニ ヤナ漁期は春(夏とも稱す)秋二期に分たれ收支決算は各期毎に行はれたこと

ホ 五人五株を以て一口(一單位)となし收入支出は共に五等分したこと(ヤナ仲間は二十株より成る)

ヘ 株主と實際の従業者(下作)とは収益を折半したこと(但し下作はヤナ仲間と直接の關係を有せず)

ト 「何某築」と云ふが如き場合のヤナは具體的なものでなく何某の所持するヤナ株(何某株)といふ意味にして抽象的な權利を指したこと(築主とあるも株主に同じ)

( 46 )

( 47 )

チ 仲間内の問題は合議制で處理し、紛争の如きは須原村の東氏が取扱ひ更に解決困難の時は兵主神社神主を煩はしたること

最後に全體を通じて關係人物の立場なり態度なりに就て一考すると、小三郎は仲間から排斥を受けたり奉行所の心證を害したりして頗る不利な立場に在つたが、飽くまでも抗争を續けたところに一種の「町人型」を示してゐる。勿論、彼にとつては死活問題であつたから敢然と抗争したのであるが、獨占主義的營業團體たるヤナ仲間内に於ける自由主義的異端者として注目すべき存在であつたと思ふ。

新右衛門は明に保守派で仲間慣習法の擁護を標榜するものゝ如くであつたが、實は小三郎に對する反感を利用して仲間より彼を除名せんと企てたのではないかと考へられる點があり、神主井口宰相も、大體、これに加擔したものである。かくして小三郎の立場は愈々不利なものとなつたのであつた。

しかるに問題のヤナ株を相續せる源次が第三者の如き立場に在つて頗る公平な態度を示したため、新右衛門なども仲間慣習法の確保に満足の意を表するだけで終り、謂はゞ名を得て實を失つた形であつた。之に反して小三郎は、案外、有利な解決に達し名を失つても實を得たわけであつたが、仲間内の紛争に於て個人が多數に抗し得た點は注目に價するであらう。

要するに兵主神社の神供漁場はヤナ漁業者の一團によつて獨占せられたものであつたが、そのヤナ漁業者は「仲間」を結成し各自に「株」を所持してゐたのである。本稿にて取扱つた一紛争は、この仲間内に於て特殊な一株を繞つて演ぜられたもので、謂はゞ内紛の一例なるが故に相當の特色があつたと考へられるのである。(完)